

Part1000 ◆ 「ミクロ経済」への誘い

ミクロ経済学の分析対象は、only one（ときに only two）です。すなわち、
① 消費者理論では、1人の消費者
② 生産者理論では、1つの供給者（1企業）
③ 市場理論では、1つの財（商品やサービス）
について分析するという事です。それぞれ、もう少し詳しく紹介しましょう。

1) ミクロ経済の stage 構成

ミクロ経済学は、大きく分けると、次の3つの stage で構成されます。

①消費者理論

個々の消費者の考え方や消費行動を、あくまで消費者としての立場で分析します。したがって、生産者との関わりはほとんど考慮しません。

少し専門的な表現をするなら、「財やサービスを消費する消費者（家計）が、自らの満足（効用という）を最大にするために、どのような消費行動をとるか」を分析する舞台です。

一般に、消費者は財を消費すればするほど、満足度（効用）がアップしますが、所得（予算）という制約条件があるため、無限大には消費できません。また、所得や価格が変化したときの消費行動の変化についても分析します。

②生産者理論

個々の生産者（主に企業）の考え方や生産活動を、あくまで生産者としての立場に立って分析します。このため、消費者との関わりは、それほど考慮しません。

少し専門的な表現をするなら、「財やサービスを生産する生産者（企業）が、自らの満足を最大にするために、どのような生産活動を行うか」を考えます。生産者にとっての満足とは、まさしく「利潤（収入－費用）」そのものであり、常に利潤最大を追求することになります。

ちなみに、生産者は2種類に大別されます。ライバルが多数存在する完全競争市場における企業と、ライバルがまったく存在しないか、あるいは数社しかいない不完全競争における企業です。

③市場理論

ここで初めて、消費者と生産者がの双方の立場に立ちます。しかも、1人とか1社ではなく、ある財やサービスを需要するすべての消費者と、それを供給するすべての生産者が共演する場として、「市場（しじょう）」を捉えることとなります。

ただ、ここでもやはり、個々の財やサービスごとの分析となります。

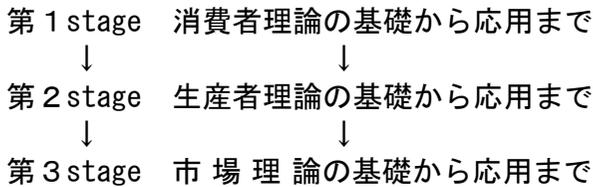
少し専門的な表現をするなら、生産者が財（商品やサービス）を生産（供給）し、消費者がそれを消費（需要）する舞台が「市場」です。そして、消費者と生産者の双方の満足を同時に満たす状態を「市場均衡」といいます。

また、一般に③とは区別し、④、⑤として構成されることになるのですが、「社会全体にとって望ましい資源配分のあり方」とか「市場の失敗」といった舞台もあります。これらはちょっと説明しにくいので、ここでの説明は割愛させていただきます。

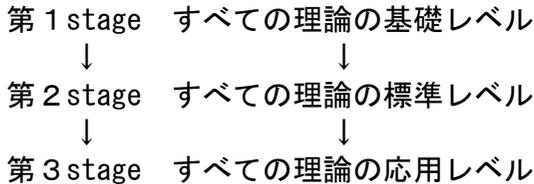
以上がミクロ経済の stage 構成の概略です。イメージだけでも、つかんでいただければ幸いです。

2) 本書の構成（進め方）スタイルについて

経済学に関する書籍や、いわゆる公務員予備校の講義の多くは、



という順に進めていくのが一般的ですが、本書においては、次のように展開します。



3) 「ミクロ」と「マクロ」の違いについて

前ページでお話しましたように、ミクロ（第1部）では「個」を分析するのに対して、マクロ（第2部）経済では、「一国全体」を分析します。すなわち、

- 1つの国全体の所得 → 国民所得といいます。
- 1つの国全体の生産量 → 国内総生産（GDP）といいます。
- 1つの国全体の財の価格 → 財市場における物価を意味しますが、労働市場においては賃金を意味します。

また、ミクロの舞台の分析対象は財市場のみですが、マクロの舞台では、多彩な顔ぶれの市場たちが登場します。具体的には、財市場に加えて、資産市場（貨幣市場）、労働市場、国際マクロ（国際収支）といった様々な市場が登場してきます。

4) 経済学は未知との遭遇

ところで私（著者）自身、どんな学びにおいても、深くつきつめて本質を理解することにこだわるタイプの人間です。

ですから、これから本書で学んでいただくあなたにとっても、可能な限り本質を理解していただけるように配慮して表現したつもりです。とは言え、経済学という舞台があなたにとって初めての経験だとすれば、どこかで行き詰まったり、納得できない理論と遭遇するかもしれません。それは、微分を含む数式のシーンに限らず、考え方や前提についても起こり得ます。

例えば、「消費者は、たくさん消費すればするほど満足度がアップする」…違和感を覚えませんか。想像してみてください。飲み過ぎて気分が悪くなったとき、それでもあなたは飲み続けますか。普通はそんなことはしませんよね。でも、ミクロ経済の世界では、予算が残っている限り、飲み続けるのです。

そんな不可解なシーンに遭遇したとき、あまり完璧な理解にこだわり過ぎると、そこから一步も前に進めなくなってしまうことになりかねません。

なので、そんなときには、「所詮は机上のモデル分析」と割り切って、歩を進めていただきたいと思います。初めて学ぶ方にとっては、経済学の理論は、ある種の「未知との遭遇」なのであります。